

光文社 古典新訳 文庫

失われた時を求めて 1

第一篇「スワン家のほうへ I」

プルースト

高遠弘美訳



光文社

失われた時を求めて

*本PDFは『失われた時を求めて 第一篇「スワン家のほうへ」』（2010年、光文社刊。本体952円＋税）の本編のサンプル版です。
株式会社光文社の許可なく本ファイルを販売・改変することは著作権法違反となります。また、本ファイルのコピー・転載はご遠慮ください。
*「訳者前口上」は省いております。

目次

訳者前口上

9

第一篇「スワン家のほうへ I」

21

第一部 コンブレー

23

読書ガイド

高遠弘美

433

年譜

456

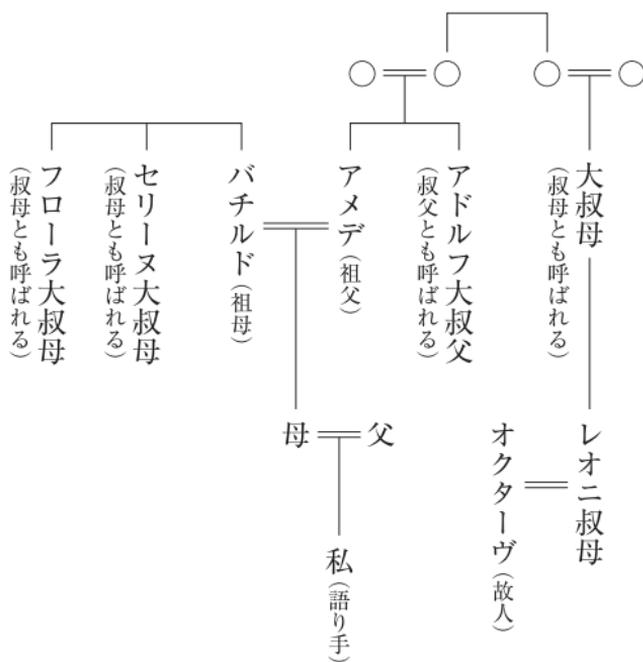
Title : À LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU

Du côté de chez Swann

1913/1919/1987

Author : Marcel Proust

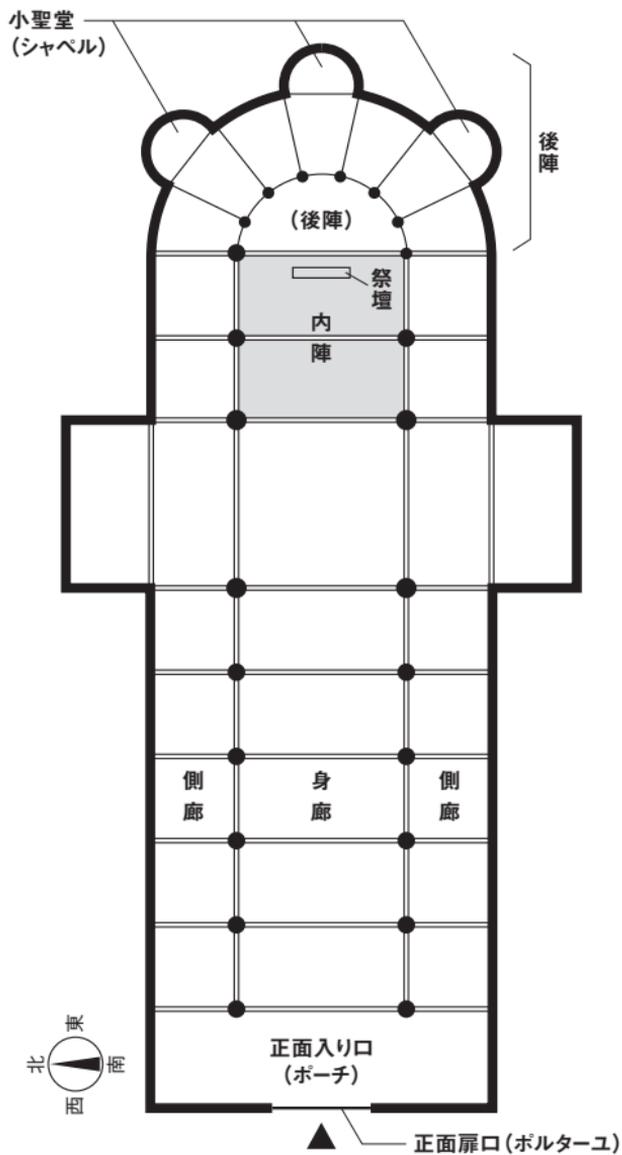
『失われた時を求めて 1』
語り手の家族



══ 婚姻

失われた時を求めて

教会内部の基本的な構造



第一篇「スワン家のほうへⅠ」

第一部 コンブレー

第一章

長い間、私はまだ早い時間から床に就いた。ときどき、蠟燭ろうそくが消えたか消えぬうちに「ああこれで眠るんだ」と思う間もなく急に瞼まぶたがふさがってしまったこともあった。そして、半時もすると今度は、眠らなければという考えが私の目を覚まさせる。私はまだ手に持っていると思っていた書物を置き、蠟燭を吹き消そうとする。眠りながらも私はいましがた読んだばかりの書物のテーマについてあれこれ思いをめぐらすことは続けていたのだ。ただ、その思いはすこし奇妙な形をとっていて、本に書かれていますもの、たとえば教会や四重奏曲やフランソワ一世とカール五世の抗争1そのものが私自身と一体化してしまったような気がするのである。そうした思い込みは目が覚めて

ガストン・カルメット^{*}氏に。心からの深い感謝のしるしとして。

^{*}「ファイガロ」紙主筆。一八五八―一九一四年。
プルーストに原稿を依頼したり、励ましたり
した。

は、旅人がたどる細い田舎道をくつきりとその記憶のうちに刻むだろう。

私は、気持ちのいい枕の両側、頬ほおを思わせるあたりにそっと自分の両頬を押し当てる。枕の頬は私たちの幼年時代の頬のように、ふっくらとしてさわやかに感じられる。時計を見るために私は燐寸マツチをする。もうじき午前零時になる。午前零時。それは旅を余儀なくされて、見知らぬホテルで寝なくてはならない病気持ちの男が、発作で目が覚めた拍子に、ドアの下から差し込む一条の光に喜びの声をあげる頃おいである。ああ、よかった。もう朝になった！ もうすぐ従業員たちも起こされるだろう。そうしたら呼び鈴を鳴らせばいい。誰かが助けにきてくれるはずだ。助けてもらえるという期待が、苦痛に耐える勇気を与えてくれる。そう、いましも、足音が聞こえたではないか。しかし、足音は近づいたかと思うと、遠ざかってゆく。ドアの下の光の筋も消えてしまった。ほんとうはいまは真夜中で、ガス灯が消されたところだ。最後の従業員も行ってしまったから、一晩中、薬のないまま苦しまなくてはならない。

1 フランソワ一世（一四九四〜一五四七年。フランス国王）とカール五世（一五〇〇〜一五八八年。神聖ローマ帝国皇帝）は、北イタリアの権益をめぐって激しく争った。

も少しの間は残ったままだ。それは私の理性を混乱させることはないが、鱗うろこのように目に覆いかぶさるので、燭台の灯がもう消えているかどうかを確かめることはできない。だが、かような思い込みはしだいに意味不明なものに変わってゆく、あたかも輪廻転生を経たあとの前世の思考のように。書物のテーマは私から離れ、それをさらに追うか否かは私の裁量に任される。と、ただちに私は視力を回復し、自分のまわりが暗闇であることに気がついて愕然がくぜんとする。その闇は目に優しく、目の疲れを癒いしてくれるが、私の精神にとってはおそろくもつと優しく、癒しに満ちたものだ。私の精神からすると、暗闇ははつきりとした理由もなく存在する人知を超えた、まさしく曖昧あいまい模糊もことしたものに思われる。いったい何時になつたのだろうと私は考える。汽車の汽笛が聞こえてくる。それは近く、また遠くから聞こえ、ちょうど、森のなかで一羽の鳥が鳴いたときのように、あいだに横たわる距離を際立たせ、旅人が近くの小駅に急ぎ足で歩いてゆく荒涼とした平原の広がりを感じさせた。はじめての場所、慣れぬ振る舞い、つい最前までしていたおしゃべり、夜の静寂のなかでいまなお後ろから聞こえてくるような気がする、我が家ならぬ灯のもとで交わされた別れの言葉、帰路につくと思うとゆくりなくもこみ上げてくる喜び……こうしたことたかで昂ぶる胸の思い

としていた快樂から生まれた女なのに、私は快樂を与えてくれるのはまさにその女しかいないと考えてしまう。私の体は女の体を通して私自身の官能のほてりを感じ、女の体とひとつになろうとして、目が覚める。ついでしたが別れたばかりのその女に比べれば、ほかの人間などはるかに遠い存在のように思われた。私の頬は女の口づけでいまだほてっていたし、体は女の胴体の重みでぐったりしていた。その女が——とぎとしてそういうことがあったのだが——かつて出会ったことのある女の特徴を備えているときは、その女のことを思い出すという目的に私は全力を傾注した。あたかもかねてより憧れていた都市をこの目で見るために旅に出る人びと、夢で見た魅力を現実に味わうことができるかと考える人びとのように。しかし、女の記憶は少しずつ消え

2 当時は、ことに上流家庭を中心に、魔除けの意味も含めて、幼い少年に少女のような恰好をさせることが広く行われていた。巻き毛もその一つと考えられる。作者自身、巻き毛を引っ張られる恐怖を草稿で何度か語っている。それを切られるということは、いわば、精神的・肉体的に少女から少年へと変貌する新たな時代の開始であるとともに、恐怖の的となる身体部分を切り取られるということからすれば、一種の去勢でもあって、少年から少女への逆行をも潜在的に意味していたのかもしれない。プルーストにしばしば見られる性の混在の小さな例と言えるだろう。

私はふたたび眠りにつく。ときおり目覚めても、それはもうごく短い瞬間の目覚めでしかない。壁板が自然にきしむ音が聞こえたり、目を開けて万華鏡のような闇を見つめたり、一瞬差す意識の光に支えられながら、家具や部屋、つまり、私自身がその小さな一部にすぎないすべての事物（その一瞬が過ぎれば、私はすぐにそうした事物そのものの無感覚状態のなかに戻ってゆくのだが）を包み込む眠りの世界を味わったりするのとはそんなときである。あるいはまた、眠りながら私はいとも簡単に、永遠に過ぎ去った幼少期のある時期に戻って、たとえば私の大叔父が巻き毛を引つ張らないだろうかといった、いかにも子どもっぽい恐怖をいままた味わったりもした（その恐怖は、少し大きくなって巻き毛を切られた日²に忽然^{こっぜん}として消えた。それは私にとって新たな時代の始まりを意味した）。眠っているときには巻き毛を切られた日のことを私は忘れていたのだが、何とか目覚めて、ああこれで大叔父の手から逃れたと思ったとたん、その記憶が蘇^{よみがえ}ってくる。それでも、万一の場合に備えて、ふたたび夢の世界へ戻る前に、私は枕ですっぽり頭を隠すのだった。

眠っている間に、ときには、イヴがアダムの肋骨^{ろっこつ}から生まれたように、無理な姿勢を続けて痺^{しび}れた腿^{もも}から、女がひとり生まれ出ることがあった。自分がまさに味わおう

ついた場所の見取り図を手放してしまった精神は、真夜中に目覚めたとき、自分がどこにいるか認識できない。最初は自分が誰かということすらわからないのだ。私のうちにあるのはただ存在しているという、もしかしたら動物がもつとも深い部分でその震えを感じているかも知れない、単純きわまる感覚だけである。私に比べたら、大昔、洞窟で暮らしていた人びとのほうがまだ何かを保有していただろう。そのとき、記憶——と言って、いまいる場所の記憶ではなく、かつて暮らしたことのある場所やいたかもしれない場所の記憶——が、ひとりでは脱出できない虚無から私を引き上げるために訪れる天の救いのように私の内に立ち返ってくる。一瞬のうちに私は何世紀にも及ぶ文明の歴史を飛び越える。石油ランプや折り襟になったシャツがぼんやりと見え、それで私という存在を形づくるあらゆる特徴が少しずつ元のかたちを取り戻してゆくことになるのだ。

私たちの周囲の事物が不変不動に思われるのはおそらく、それらが他の事物ではあ

3 旧約聖書「ヨシユア記」十章十二「日よギベオンの上に止まれ月よアヤロンの谷にやすらへ」
を連想させる表現。

4 おそらくH・G・ウェルズ『タイムマシン』（一八九五年）を念頭に置いた表現。

てゆき、私は自分の夢に出てきた女をいつしか忘れていたのだ。

眠っている人間は身のまわりに糸にも似た時の流れを、そして、長い歲月やさまざまな世界が持つ一定の秩序を輪のように巻きつけている。目覚めたとき、人は本能的にそれらを探って、自分が現在いる地点や目覚めまでに流れた時間を即座に読みとろうとする。だが、時の流れやそうした秩序はもつれて渾沌こんとんとしていくかもしれないし、切れたり壊れたりしている可能性もある。眠れぬままに朝を迎え、ふだん眠るときなら絶対にしてない姿勢で本を読んでいてようやく眠気に襲われたような場合は、片腕を持ち上げるだけで、太陽をとどめ、後退させることもできるだろうが、眠りから覚めた直後は何時かもわからず、ついさつき床にいたばかりだと考えたりするかもしれない。あるいはそれよりも不自然で、寝るにはほど遠い姿勢、たとえば、夕食のあと、肘掛ひじかけ椅子いすに座つてうとうとしたようなときには、身のまわりの世界は秩序を失い、完全に変調をきたすだろう。それは魔法の椅子に座つたまま全速力で時空を旅するよなものであり、まぶたを開けた瞬間には、自分が寝たのは何ヶ月も前、それも別の国でだったと思うに違いない。だが、私の場合は、自分のベッドで横になり、深く眠って、精神の緊張が完全にゆるみさえすれば、それと同じ状態になる。私が眠りに

たような脇腹は、いまどちらを向いているのかを探ろうとして、たとえば、天蓋てんがい付きのダブルベッドで壁に向かって横になっていると想像する。すぐに私は思う。「なんだ、お母さんがおやすみを言いに来てくれなかったのに眠ってしまったんだ」。私は、何年も前に他界した田舎の祖父の家にしたのだ。私の体や、下側にした脇腹は、私の精神が決して忘れてはいけなかったある過去の忠実な番人として、私に、コンブレーの祖父母の家の私の寝室にあった、天井から細い鎖で吊るされたボヘミアンガラス製の壺型常夜灯のともしびやシエナ産大理石でできた暖炉を想起させた。それははるかに遠い日々のことではあったが、正確に頭に描くことこそできないとしても、いま現在目の前に存在するものとして想像することができたし、もうすぐ完全に目が覚めればもっとくつきりと目に浮かぶはずのものであった。

そして、また別の姿勢の記憶が蘇ることもあった。その記憶のなかでは、部屋の壁は違う方向に延びている。私がいるのはサン・ルー夫人の田舎の別荘で私にあってがわられた寝室だ。いけない！ もう十時をまわった。晚餐はもう終わってしまっただろう！ 毎夕、サン・ルー夫人との散歩のあと、食事にゆくための服を着る前にひと休みする習慣があるのだが、今日は寝過ごしてしまったらしい。そう考えたのは、コン

り得ない、当の事物そのものであるという私たちの確信のせい、ないしは、それらを前にした私たちの考えが不変不動であるせいである。だが、いずれにしても、そのよ
うな目覚めを迎えるときは、私の精神はさわさわと浮き足立って、自らがどこに
かを空しく突き止めようとする。その結果、闇のなかですべて——事物も国も歲月
も——が私の周囲をぐるぐると回ることになる。動けないほど疲れ切っている私の体
は、どこにどのような疲労が溜まっているかによって、自らの四肢の位置を正確に知
ろうとするが、それはその作業を通じて、壁の向きや家具の位置を推し量って、いま
いる場所を頭のなかで再構成し、自分がどこにいるのかを特定するためだ。体の記憶、
脇腹わきばらや膝や肩の記憶が次々に喚起するのは、かつて体がそこで眠ったことのある部屋
にはかならない。その一方で、暗闇の中で体を取り巻く目に見えない壁は、頭に浮か
んだ部屋の形に合わせて場所を変えながらめまぐるしく動いているのだ。状況をすり
合わせて自分がどこで寝ているかを頭が判断する前に（頭は時間と形態をまだはつき
りと見定める段階に至っていない）、私の体のほうは、それぞれの場所について、
ベッドの種類、ドアの位置、窓からの光の入り方、廊下の有無を思い出す——しかも、
寝つく寸前に頭に浮かび、目覚めたときにも消えていかなかった想念とともに。麻痺し



うしな とき もと
失われた時を求めて 1
第一篇「スワン家のほうへ I」

著者 プルースト
たかとお ひろみ
訳者 高遠 弘美

2010年9月20日 初版第1刷発行

発行者 駒井 稔
印刷 慶昌堂印刷
製本 ナショナル製本

発行所 株式会社光文社
〒112-8011東京都文京区音羽1-16-6
電話 03 (5395) 8162 (編集部)
03 (5395) 8113 (書籍販売部)
03 (5395) 8125 (業務部)
www.kobunsha.com

©Hiromi Takarō 2010

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取り替えいたします。
ISBN978-4-334-75212-5 Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。